

2021年8月7日

年間第19主日

菊地功大司教 メッセージ

列王記は、預言者エリヤがバアルの祭司たちと対峙し勝利した後、王妃イゼベルから恨みを買って、荒れ野へと逃れていく話を記します。神の道に忠実であり、その義を貫徹しようとすることは命がけであることが明示されている一方、精根尽き果てた義の人エリヤを、神は励まし続けたとも記されています。神の与えた使命を果たそうとする人に、神は寄り添って励ましてくださいます。

パウロはエフェソの教会への手紙で、わたしたちを生かし力づけてくださる聖霊に逆らうことなく、神に倣うものとして、「互いに親切にし、憐れみに心で接し、・・・ゆるし合いなさい」と勧めます。神の聖霊に満たされているものは、キリストご自身が愛ゆえにあがないのいけにえとなられたことに倣い、愛によって歩むのだとパウロは指摘します。

ヨハネ福音は、先週に続けて、主ご自身が「いのちのパン」であり、「天から降ってきた生きたパン」を食べるものは、「永遠に生きる」と宣言された言葉を記しています。

賜物であるいのちを生かし続けようとする神の愛は、主ご自身が自ら十字架へと歩まれたその行為のうちに明示されています。わたしたちには、キリストをいただくものとして、その神の愛、すなわちすべてのいのちを守り生かそうとする神の愛に応えて生きる務めがあります。

わたしたちにとって、すべてのいのちを守るために行動することは、平和のための行動でもあります。パウロが指摘するように、「無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなど」は、「一切の悪意」とともに、いのちを大切に作る行動とは対極にあり、すなわち平和を破壊する行動につながります。しかし「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなた方を赦してくださったように、赦し」あうことは、いのちを守る行動に繋がり、平和を築き上げます。

「過去をふり返ることは、将来に対する責任を担うことです」と、教皇ヨハネ・パウロ二世は、1981年に広島で述べられました。

第二次世界大戦が終結してから今に至るまで、戦争の悲惨な現実が繰り返し多くの人によって語り続けられてきたのは、戦争が自然災害のように避けることのできない自然現象なのではなく、まさしく教皇ヨハネ・パウロ二世が広島で指摘されたように、「戦争は人間のしわざ」であるからに他なりません。そして、「人類は、自己破壊という運命のもとにあるものでは」ないからこそ、その悲劇を人間は自らの力で避けることが可能です。

教皇フランシスコは、長崎の爆心地公園で、こう述べられました。

「軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです。今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられています。しかし、武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは神に歯向かうテロ行為です」

教会にとって平和とは、戦争がないことだけを意味してはいません。それは神の秩序が確立された状態であり、すべてのいのちが大切にされている共通の家で、だれも排除されることのない社会を実現することにあります。天上での完成の日を目指して、わたしたちは神が愛をもって創造されたこの世界を、日々、神の望まれる姿へ近づける努力を怠ってはなりません。その使命を果たす努力を続けるわたしたちに、なかなかゴールに到達できずに疲れ切ったわたしたちに、主は常に寄り添い、ともに歩んでくださいます。